

【 研究ノート 】

豊後（大分）におけるルイス・デ・アルメイダ
—異文化コミュニケーション的観点から—¹⁾

清水 孝子
(日本文理大学)

A Study of Luis De Almeida in Bungo (Oita)
from the Viewpoint of Intercultural Communication

SHIMIZU Takako
(Nippon Bunri University)

Abstract. This preliminary research is a historical study to clarify intercultural communication between the Japanese local people in Bungo (Oita) and the Jesuit missionaries during the 16th-century Japan, focusing on Luis De Almeida who opened the first hospital and also devoted the rest of his life to the Jesuit missionary work in Japan. The missionary letters which were sent to the Society of Jesus help us to realize how the Jesuit missionaries faced to the Japanese local people. The purpose of this study is expected to give us an effective approach to communicate among people with different cultures through the Jesuit letters concerning Luis De Almeida in Bungo (Oita).

0. はじめに

コミュニケーション研究の一分野に「異文化接触」に関する分野がある。遠山（1997）は、「日本社会・文化の形成に大きな影響を与えた異文化接触に関する歴史的事件は、「①仏教伝来、②鉄砲・キリシタンの到来、③江戸幕末・明治維新期の西欧文明の到来、④日本の敗戦に伴うアメリカ文明の到来」（p. 106）であるという。また、遠山（2001）は、「今後の異文化コミュニケーション研究の一分野として、歴史という素材にアプローチしなければならないと考えているが、歴史と文化はコミュニケーション研究の視点からみれば、まことによく似た分野である」（p. 160）と指摘する。さらに、遠山（2005）は、「この研究方法は歴史の研究そのものを目的とするものではなく、異文化コミュニケーションを歴史的な観点から考察することにある」（p. 71）という。

本稿では、上記の「キリシタン到来」に関する史料をもとに、豊後府内（現在の大分県大分市）の地で、育児院や病院を創設し布教活動にも専念したルイス・デ・アルメイダ (Luis De Almeida, 1525-1583) ²⁾に注目する。1549年にフランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier, 1506-1552) が日本でキリスト教の宣教を始めてわずか30年余り後の1585年には、全体で10万人近くのキ

リスト教徒がいたとある（五野井、1983、p.30 参照）。ザビエルがキリスト教の伝道を開始してから、カトリック男子修道会・イエズス会は、布教、教育、宗教文学などで活発に働き、後に登場する巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano, 1539-1606）は、日本文化への順応、日本人聖職者の養成事業などによって将来の自立した教会づくりを目指していく。ザビエルとヴァリニャーノを繋ぐキーパーソンが、本稿で紹介するアルメイダである。本稿では、異文化コミュニケーションの実践者としてのアルメイダが、言葉も文化も異なる人々との間の異文化の壁を乗り越え、どのように布教活動を勧めていったのか、文献的調査によって明らかにする。

1. キリシタン到来とコミュニケーションに関する先行研究

村田（2013）は、キリスト教伝来初期の16世紀後半から17世紀前半において来日した宣教師が残した日本語に関する史料や宣教師と日本語及び日本文化との関係については、すでに多くの研究が提出されているとし、それらの研究には大きな二本の支柱が見て取れ、分類名を与えるならば「キリシタン語学」と「キリシタン史学」という呼称が適切であると指摘する（pp. 1-2 参照）。とはいえ、その両者が二分法で分けられるわけではなく、両方のカテゴリーに跨る研究も少なくないとする。村田は、語学と史学の融合ではなく、歴史的な現象（史実）を異文化コミュニケーションの観点から検証する立場をとり、イエズス会の巡察師として来日したヴァリニャーノと1926年に日本に派遣されたサレジオ会の司祭ヴィンチェンツォ・チマッティ（Vincenzo Cimatti, 1879-1965）の日本語・日本文化に対するアプローチを主軸に異文化コミュニケーションの史的研究を試みている（p. 12 参照）³⁾。

2. 研究方法—歴史的史料による調査—

「キリシタン到来」に関する史料が豊富である理由は、イエズス会に所属する宣教師達は、日本の情勢や布教の状況などを書簡にしてイエズス会に送っているからである⁴⁾。現在確認されている日本発信の書簡のうち、1557（弘治2）年から1562（永禄5）年までを見ると、書簡の65%が豊後（大分）から発信されている（大分県立先哲資料館、2001、p. 2 参照）。また、1549（天文18）年から1617（元和3）年の間に豊後から発信された宣教師等の書簡は、現在98通（同文の書簡2通と年報1通を除くと、個人書簡は95通。天正遣欧使節団が持参した大友宗麟の書状は含まない）確認されている（p. 6 参照）。本稿で紹介する書簡は、『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譯文編之三 弘治元年11月—永禄2年11月』（東京大学史料編纂所、2014）に拠る。1555（弘治元）年11月から1559（永禄2）年1月までのイエズス会宣教師が書き送った、日本等アジアに関する情報を記した書簡の翻訳文が収められている。日本情報としては、大内氏や大友氏の家中の騒動や内乱や平戸の布教状況の詳細等が語られている。なお本稿で参考にした主な史料は、アルメイダが豊後府内（現在の福岡県大分市）で活躍した時期に関係する下記の書簡である。本稿では、その書簡の中から、歴史家とは異なる、異文化コミュニケーションという視座から発見できる史料を随時引用しながら、アルメイダの宣教のアプローチに迫りたい。なお、史料の引用については、（ ）や〔 〕などをそのまま引用しているが、引用にある《 》内の文言は筆者が補ったものである。また、句読点などは筆者によって変更した箇所もある。

1) 1556年1月7日（弘治元年11月26日）付、マラッカ発、ルイス・フロイスのゴアにある

イエズス会員宛書翰 (101)

- 2) 1557年10月29日(弘治3年10月8日)付、平戸発、ガスパル・ヴィレラのポルトガルにあるイエズス会員宛書翰 (106)
- 3) 1557年11月1日(弘治3年10月11日)付、豊後発、ルイス・デ・アルメイダのメルシオール・ヌーネス・バレット宛書翰 (107)
- 4) 1557年11月7日(弘治3年10月17日)付、豊後発、コスメ・デ・トルレスのイエズス会員宛書翰 (108)
- 5) 1558年1月10日(弘治3年12月21日)付、コチン発、メルシオール・ヌーネス・バレットのヨーロッパにあるイエズス会員宛書翰 (112)
- 6) 1559年11月1日(永禄2年10月2日)付、豊後発、バルタザール・ガーゴのインドにあるイエズス会員宛書翰 (122)
- 7) 1559年11月20日(永禄2年10月21日)付、豊後発、ルイス・デ・アルメイダのイエズス会員宛書翰 (125)
- 8) 1559年11月(永禄2年10月2日~11月2日)付、豊後発、ルイス・デ・アルメイダのメルシオール・ヌーネス・バレット宛書翰 (127)

3. アルメイダの経歴

1525年ポルトガルのリスボンで生まれたアルメイダは、外科医の免許を取得していた。彼は、1555(弘治元)年から28年間、日本に滞在する。若桑(2008a)は、その生涯を調べたレオン・ブルドン(León Bourdon)が、アルメイダのことを、「さまざまな異なった文化を理解する態度と、賢明な洞察をもって、この太陽の昇る帝国の南で、もっともうるわしい成果をおさめた」(p. 25)と絶賛したと、紹介している⁵⁾。ルイス・フロイス(Ruís Frois, 1532-1597)の書簡(1556年1月7日付)によると、アルメイダについて次のように紹介している。

ドゥアルテ・ダ・ガマの船には、外科医術を大変理解し、ラテン語にもかなり明るく、4000乃至5000クルザードの財産を所有する、ルイス・ダルメイダ(ルイス・デ・アルメイダ)という名の若者が乗っていました。我等の主(キリスト)に心を動かされ、病に苦しむ哀れなキリスト教徒の窮乏と見捨てられた様子に同情したこの者は、そのままその地(日本)に残って、貧しい人々を収容し、大いなる愛と慈善の心でその人達の治療にあたる病院を、自らの負担で1つ建てました。(東京大学史料編纂所、2014、p. 16)

1555(弘治元)年に豊後(大分)へ来る3年前の1552年、27歳のアルメイダは、東洋貿易に参加して長崎に上陸している(大分県立先哲資料館、2001、p. 2参照)。1549年にザビエルが鹿児島に到着した3年後のことである。そのザビエルは1551(天文20)年、大友義鎮(後の宗麟)(1530-1587)から布教を許されている。医師の免許をもった前途有望の若者であったアルメイダが、中国で生糸を仕入れして日本で売りさばく有利な貿易に投資しながら、自分でも貿易船を乗り回して30歳を前にして巨万の富を蓄えた。しかし、仲介貿易で巨利を得たアルメイダは、何故か祖国から遠い島国日本でイエズス会に入会し、私費を投じて貧しい人々の救済に献身し、布教活動に専念する。1579(天正7)年マカオに赴き、司祭の叙階を受け、再来日したが、1583(天正11)年、健康がすぐれず天草で没する。

4. アルメイダの育児院創設に見る異文化衝突

アルメイダが豊後府内に残った理由は、多くの生まれたばかりの子どもが殺されるのを見たからである。「間引き」について、フロイスの書簡（1556年1月7日付）では、次のように記している。

すでにパードレ・フランシスコ（ザビエル）の書翰でご存知でありましょうが、誇り高く貧しい日本人は、1つの過ちを犯しております。貧しい家に子供が生まれると、貧乏人は救済を得られないし、貧しく惨めに生きるための人生は必要ないと言って、すぐさま殺すか、産婆に首を踏みつけさせています（間引き）。この若者（アルメイダ）はもう1軒の家を建て、このような者達に子が生まれると、彼等が殺さないうちに、どうか彼等にその子を彼に託して欲しいと懇願し、そこで彼が後に教育し、生きる手立てを見つけてやろうと養育させています。彼は自ら、キリスト教徒や異教徒に対して、まことに良き例そして模範を示し、大変道徳的に生活しております。（東京大学史料編纂所、2014、p. 16）

また、ガスパル・ヴィレラ（Gaspar Vilela、1525-1572）の書簡（1557年10月29日付）にも、悪しき日本人の慣習としての「間引き」が、次のように記されている。

当地の人びとの間では、罪の中でもとりわけ身の毛のよだつものがあります。すなわち、子供を殺すことです。人びとが言うには、子は多く必要とせず、家を存続させるためには1世代につき1人か2人で十分であり、それより多ければ貧しく悲惨な暮らしになるということです。（東京大学史料編纂所、2014、p. 71）

さらに、「間引き」について次のように言及している。

後になって貧しく暮らすのを絶えず悔やむことに比べれば、子供を殺すことによる痛みは一時にも及ばないとのこと。彼等は、子供を養う余裕がないから殺すのです。従って、ある時は名誉のために、またある時は絶望のために、彼等は子を殺すことになります。（東京大学史料編纂所、2014、p. 71）

アルメイダは、子どもの「間引き」は貧しさのためであることをすぐに理解し、大友義鎮の協力を得て、育児院（孤児院、現在の乳児院兼児童養護施設）を創設する。この育児院の創設に対しては、仏教側とキリスト教側間に激しい異文化衝突が起こる。仏教とキリスト教では、「間引き」について非常に異なった考えをもっていた。このことはキリスト教が日本に入ってきた時に起こった多くの文化衝突のなかでも特に深刻な問題をひき起こしたとある（若桑、2008a、pp. 40-46参照）。アルメイダは普通のキリスト教徒として、西洋にあるような施設をつくって貧しい母親が罪を犯さなくてすむようにしたいと思っただけだ。しかし、文化の相違はこの点では非常に深いものがあり、ヴィレラの書簡(前述)には、仏僧による流言が紹介されている。

当地では、私達について数多くの偽証がなされており、ことに私達は人間を食べると言われています。実際にこの話はあまりにも用いられているので、日本中に広まっています。その捏造者は仏僧達で、彼等はこれに信憑性を与えるため、血染めの布を扉に投げつけるのです。当〔1〕557年に、彼等は数回それを行いました。また、私達は人間の肉体に入り込んだ悪魔であり、私達が語ることは私達の中で話す悪魔の誘導によるものだから、私達を信じないようにも言っています。これに関しては、この者達は悪魔だからである、と書き付けたものを私達の扉に掲げます。この地で、私達は彼等から、このような仕打ちをたびたび受けているのです。（東京大学史料編纂所、2014、p. 69）

外国人の宣教師は肉を食べるので、台所には肉や骨や血があり、実はそれは集めた赤ん坊を食べているのだという噂が広まったのであろう。そのため育児院は1年後に廃止される。しかし、栄養失調の乳幼児に、牝牛を飼って牛乳を与える効果は歴然としており、貧しい人々からのアルメイダへの信頼は高まり、布教活動を活性化させることにつながる。

5. アルメイダの病院運営に見る異文化融合の取り組み

5. 1. 一般病棟とハンセン病棟統合型総合病院

1557年、府内（大分市）に、アルメイダ達によって病院が設立される。一般の病棟のほか、日本で最初のハンセン病棟もあった。ヴィレラの書簡（前述）に、貧しい人々を救うための病院設立への府内の人々の反応が読み取れる。

私達には病院を建てるのが良いと思われましたが、それは彼等の間では新奇なことです。なぜなら、彼等はそれが良いことだと知ってはいますが、貧者と交わるのを、穢らわしくも卑しいことだと考えているからです。私達はこの件について国王に話しました。彼は、すでにそうすることを自ら決心していましたが、機会がなかったから実行しなかったのであり、[病院の建設を] 大いに喜ぶ [といたしました]。私達は直ちに実行に移し、今教会がある地所に隣接し、かつての教会があった土地に建設しました。私達はそこに2室を有する大きな家屋1軒を立てました。すなわち、1室は容易に治療し得る傷や病気 [の患者] のためであり、この部屋の奥にあるもう1室は、当国に極めて多いライ病⁶⁾患者に充てるものです。（東京大学史料編纂所、2014、p. 55）

5. 2. 治療の公開

府内ではさらに1559年7月1日、この貧者の病院の向かいに、もう1つ、さらに大きい病院が建つ。これは2階建てで、16室もある大きな病院で、アルメイダは、そこに外科手術のための特別なベランダを設ける。シリング（1992）は、「これは主として光線の関係によるのである。何故なら純日本家屋の内部は殆んど間接の鈍い光線を入れるのみだからである。またその他にも誹謗を予め防ぐ為でもあったようである。」（p. 106）と説明する。メスで人間の体を切るということで仏教の僧侶らが、白人が人間の肉を食べるという風評を広めたので、それを防ぐために、誰からも何をやっているかがわかるようにするためにベランダを設けたと言われている。バルタザール・ガーゴ（Balthazar Gago, 1520-1583）⁷⁾の書簡（1559年11月1日付）によると、治療用の広縁のことについて次のように記している。

[その家屋は] それぞれの側に8つの宿房を備え、人（患者）が多い時には16名を収容することができ、各室には扉（襖障子のことか。）があり、それによってそれぞれが独立して閉まった状態になります。この家屋には、患者を世話する役目の医者のために、1つの宿房が隣接してあります。[家屋の] 周囲には、あらゆる患者が衆人の眼前に出てくる広縁が1つあり、そこで機会を得て皆治療を受けます。（東京大学史料編纂所、2014、p. 265）

5. 3. 患者層の拡大

大きい病院（貧しくない人々のための病院）は大変評判になり、位の高い武士や、仏教の僧侶さえ治療を受けに来たということが、ガーゴの書簡（前述）から読み取れる。

この事業は、日本の諸王の首領（天皇または将軍を指す。）がいるミヤコ、ヴェネチアのような所である堺、公立の学問所がある坂東、仏僧達の長がいるフィアンシマ（比叡山を指

す。)にまで伝わるほどの、絶え間ない説教となっています。これらすべての地域において、病院の評判は広まっています。(東京大学史料編纂所、2014、p. 266)

患者に仏僧がいることに関して、アルメイダの書簡(1559年11月付)にも、「貴人達や土地の重立った者達の〔帰依する〕仏僧達が治療に訪れます。この夏、これらの大病から60名を超える人達が快復しました。」(東京大学史料編纂所、2014、p. 352)と書かれている。

5. 4. 西洋医学と東洋医学の融合

アルメイダは西洋医学の外科医として治療する一方で、日本人医師も内科医として東洋医学の薬の処方をしていたりしていることが、ヴィレラの書簡(前述)から分かる。日本人内科医のパウロは、府内以外の地にまで診療に出向いていたことが分かる。

市中やその周囲1、2レグア《1レグア=約5.5キロメートル》、乃至4レグアの山々には他の病人が多数あり、私達は、1人の日本人で、彼等の間では徳高き学識者にして偉大な医者である男(パウロ・キョウゼン)を選定しましたが、彼は他にも主が給うた才能を持っており、それらの日本人達を支えるべき大きな腕となっています。彼は毒草や、その他の薬草から作った多数の薬を携えて内陸へ彼等の治療に赴いていました。(東京大学史料編纂所、2014、pp. 55-56)

パウロの死去後、イエズス会日本布教長コスメ・デ・トルレス(Cosme de Torres、1510-1570)が中国の医学書で薬の調合について学んでいる。ガーゴの書簡(前述)の記述を紹介する。

そこでパードレ(トルレス)は、彼等の薬の〔調合をする〕練習をしました。それらはシナに由来し、2人の中国人〔が著した〕これら2冊の書物は学ぶのに容易であり、さまざまなものに効きます。飲むとすぐ3日熱や4日熱に作用するものがいくつかあり、同様にその他あらゆる病気に効くものもあります。(東京大学史料編纂所、2014、p. 268)

アルメイダは、中国の伝統的な薬の威力を認めていた。一方で、西洋医学のルーツとなる古代ギリシャからの伝統的な医学も尊重した。そこには、人間を身体と靈魂の双方の融合とみる思想があった。それゆえ医師は、薬で体の治療をするだけでなく、心のケアも大切にしなければならないという思想がある。当時イエズス会の修道士であったアルメイダは、東西医学の融合、物心両面のケアというスタンスで、府内の病院を運営していたと思われる。

5. 5. ミゼリコルディアによる運営方法の採用

1559年には病人の数が非常に増え、治療にあたるものが6、7人になったが、それも朝早くから午後遅くまで働いていた。また府内の日本人の12人の修道士(イルマン)も交代で看護にあたる。彼らはまた病人の手続きや、寄付金支出の規定を作ったりしている。そればかりでは、大きな病院の運営は不可能なので、ヨーロッパやマカオにならったミゼリコルディアが組織された。「ミゼリコルディア」という言葉は、日本語訳では「慈悲」または「慈愛」という意味である。つまり、自分達ではどうすることもできない人に手を差し伸べるという意味である。シリング(1992)によると、「慈悲友愛組合(ミゼリコルディア)が、往診診療と貧困者の看護の仕事を担うようになった」(pp. 103-104)とある。そして世界のミゼリコルディアと同じように、病人の世話や貧しい家族の援助だけでなく、囚人を見舞ったり、葬式を世話したりしていた。死者の埋葬方法について、ヴィレラ(1557年10月29日付)は次のように記す。

当地において死者を埋葬する方法は以下の通りです。すなわち、私達は十字架を掲げ、連祷を唱えながら、死者に付き添う多数のキリスト教徒と共に行くのですが、これは〔人び

とに]多大な感化をもたらしています。というのも、彼等は〔貧しい人であれば〕何の儀式もなく死者を犬のように葬るのを習慣としているためです。私達がかの方法で葬儀を行うのを見ると、彼等は感動します。また、その後魂は存続するという事を知らしめるために説教を行い、なおかつ〔死者の〕肉体にも深甚な敬意を表します。私達が〔死者を〕埋葬しに行く時、多くの異教徒が私達の所作を見るために来ます。(東京大学史料編纂所、2014、pp. 68-69)

アルメイダ達による医療活動についての報告の書簡から、貧富の差に関係なく医療活動を行い、東洋・西洋の壁を越えた医療を実践し、さらに現地の人への医学教育など異文化融合の取り組みが読み取れる。ミゼリコルディアの組織に支えられてはいたが、規模が拡大した病院運営には、経験のある人材は欠かせない。アルメイダは、病院運営のための修道士の派遣要請について、自らの書簡(1559年11月付)を通して、管区長への伝達を副管区長のヌーネスに依頼している。

もし、尊師にそれが良いことと思われる場合、管区長パードレに対し、当病院のために、経験があって器用で、年齢は25歳以上の、健康なイルマンを1人派遣してくださるように、書翰乃至口頭でお伝えいただければ幸いです。なぜなら、治療方法を学びながら、さらに言語(日本語)を学ぶ必要があるからです。(東京大学史料編纂所、2014、p. 353)

ところが、その後、イエズス会本部より医学研究・教授・施術禁止が通達され、1560年7月、その文書が日本布教長トルレスに届けられた。シリング(1992、pp. 110-111)によると、アルメイダは1561年以後、病院の仕事を日本人に任せ、伝道事業に献身する。1580年代においてもなお病院が存続していたという簡単な記録があるのみだが、1587年、島津軍の侵攻にあつて、府内が壊滅状態になり、アルメイダが創設した病院も戦火にみまわれ、消滅する。1557年創設以来、さまざまな業績を残したこの病院も、わずか30年で終焉を告げる。

6. 豊後(大分)における宣教師達の日本語学習と生活について

ところで、豊後で活躍した宣教師達の生活はどのようなものであったのだろうか。日本語学習については、かなり積極的に日々の日課の中に日本語学習の時間が設けられていたことが書簡から読み取れる。ヴィレラの書簡(前述)に、修道士(イルマン)達の一日が紹介されている。

ここ豊後において、私達がとっている手順は、以下の通りです。これにより、主の御旨が何事においても実行されるべく、能う限り好ましく、この地に順応することに努めています。まず、朝に祈祷を行い、これが終わると、キリスト教徒や修院のイルマン達と従僕達に対して、朝のミサを捧げます。その後、各人は職務としていることに向かいます。すなわち、治療を行うイルマンは、病院や患者の許に行つて、彼等を治療します。他にも、ロウレンソと称する日本人のイルマン(ロウレンソ了齋。平戸出身の元琵琶法師で、初期の日本布教で説教師、通訳として活躍。)は、デウスに関する事柄を多く学んでおり、洗礼の水を授かろうとしている幾人かの人びとのために、教会で説教を始めます。そして、ここ数年、新たに若干の人をキリスト教徒にし、彼等と共に殆ど1時間、あるいは必要なだけ費やします。また、質問するキリスト教徒達に多くのことを説明します。その他のイルマン達は言語(日本語)の学習を始めますが、この学習を、私達は皆、他に妨げとなることがなければ、昼と夜に実践しています。これには昼の10時までの時間が充てられ、同時刻になると食事をします。(東京大学史料編纂所、2014、pp. 80-81)

また、修道士達の日本語習熟状況について、ガーゴ（前述）が次のように報告している。

日本語をよく解するものは、イルマンのジョアン・フェルナンデス、ドゥアルテ・ダ・シルヴィア、ルイ・ペレイラ、そしてイルマン・ギリエルメ（ギリエルメ・ペレイラ）とパードレ・ヴィレラです。最も優れているのは、イルマン・ジョアン・フェルナンデスとルイ・ペレイラです。ロウレンソは情熱的に話しますが、流暢な弁舌の素質を持っておらず、トーラ（モーセ5書。通常は巻物の形状をとっている。）に似た何らかの物を用いています。イルマン達は説教を行う際に、自分の説教壇を持っています。（東京大学史料編纂所、2014、p. 261）

教会に於ける日課については、ガーゴも同様に書簡（前述）に次のように記している。

〔教会〕内での日課は、明け方、夜が明ける1時間ほど前に鐘が5回鳴らされ、夜明けの時間丁度に行われる第1のミサが始まるまで黙祷をします。ミサが終わると、それぞれの職務につきまします。それはすなわち、〔次のようなものです。〕夏には治療が〔1日〕2回行われ、病院〔に勤める〕者は、親愛なるルイス（ルイス・デ・アルメイダ）とドアルテ（ドゥアルテ・ダ・シルヴィア）、数名の召使いですが、今は1日に1回です。夕食後や食事までの余った時間には、言語と読み書きを学習します。食事の15分前には、鐘が1回打ち鳴らされ、全員が糾明のために礼拝堂に行きます。解決あるいは祈りをもってそれ（糾明）が終わると、時間に従って食事の合図が鳴らされます。（東京大学史料編纂所、2014、pp. 257-258）

メルシオール・ヌーネス・バレット(Melchior Nuenez Barreto、1520-1571)の書簡(1558年1月10日付)には、説教が日本語で行われていたとある。

日曜日には決まって日本語で彼等に説教を行いミサを挙げているからです。一部の人びとはすでに告解するようになりました。すべての善の源であるあのお方が讃えられますように。（東京大学史料編纂所、2014、p. 167）

アルメイダの書簡(1559年11月20日付)には、日本のキリスト教の進歩状況が語られている。私達は皆元気しております。主に賛美。私達はこちら（日本）のキリスト教徒を助けるため、その言語（日本語）の学習に勤しんでおります。こちらのキリスト教徒達は、デウスへの奉仕という点において大変進歩しており、時によって多少の違いはあっても、つねに新たにキリスト教徒になる者がおります。こちらの戦が引き起こす妨害や不安な状態がなければ、改宗する者はさらに多くいたでしょう。（東京大学史料編纂所、2014、p. 328）

アルメイダ自身も日本語の学習にいそしんでいたことが分かる。加藤（1985）によると、修道士達は、毎日、日本語の学習の時間をもうけ、司祭館ではつねに日本語で話し合い、食事の時は日本語で説教を行って、早く流暢に話せるようになるために努力したとある（p. 114 参照）。食生活については、ヴィレラ（前述）の書簡によると、修道士達は大根や茄子、米等を主食としていたようである。

当地で私達が取っている主な食物は、夏から冬にかけて収穫する大根とレタスの葉と、茄子やその他同様の野菜であり、これらは私達の畑が与えてくれるものです。私達はパンの代わりになっている米を除けば、以上のものが主食です。（東京大学史料編纂所、2014、p. 81）

アルメイダ達より後に豊後府内に到着したヌーネスの書簡（前述）に、日本布教長トルレスの

食生活の様子が詳しく報告されている。トルレスの人格にもよるのだが、トルレスは日本の食生活に完全に順応していることが分かる。

心優しい老いたパードレ・コスメ・デ・トルレスは私達を見、私達と言葉を交わしながら止めどもなく涙を流しました。このパードレはあらゆる徳を備え自己の節制においては貫徹しています。この人はパードレ・メストレ・フランシスコが日本へ渡った際に同行し、彼（フランシスコ・ザビエル）がインドへ戻る際、山口に残した人です。彼は山口にいた8年間ずっと（トルレスの実際の山口滞在は6年間である）、その地でいかなる種類の肉も口にすることはありませんでした。それは日本人が肉を食べることを罪行としているため、特に山口の人びとのように洗練された人びとの住む所ではそうなのです。パードレが肉を食べなかったのは鰹鱈を買わないためだけではなく、苦行に対する情熱にもよります。またかの地にはパンがなかったため、それも食べず、内陸部であるため新鮮な魚も口にせず、ただ日本人と同じ方法で炊いた米——ただしこれはよほど切羽詰まった時でないかぎり食べられないのですが——と、塩漬けの魚か野菜以外の何も食べませんでした。このため体質がこうしたものにすっかり慣れてしまい、肉は健康の害になるほどでした。（東京大学史料編纂所、2014、pp. 155-156）

ところで、この書簡を書いたヌーネス自身は、日本の食事や日本式の生活スタイルに全く適応出来ず病床に伏した。その様子を、ヌーネスの書簡（前述）から紹介する。

私はそのような恩恵に相応しい人間ではありません。すなわち、食べ物やその土地の寝床によって病に罹りました。それらは、頭の下に1本の木を置いて莫藪の上に眠り、バターや他のいかなる味付けもない米を食べるといったものでした。そこで私は重篤な状態に陥りましたので、それが可能であった時、私は騾馬に乗せられて豊後へ運ばれました。そこで私はまるまる3箇月毎日高熱と悪寒に見舞われ、もはや助かることはあるまいと思うほど危険な状態にありました。（東京大学史料編纂所、2014、pp. 171-172）

その後、ヌーネスは、インドへ帰国する。必ずしも、宣教師達がすべてトルレスやアルメイダのように現地の生活スタイルに順応できたわけでもない。

7. その後のアルメイダと布教活動

1561年以降のアルメイダは、布教活動に専念し、国内のあちこちへと布教の旅を続けた。彼の足跡を書簡資料だけから推察しても、戦国時代末期の道なき道を、実に21,300キロ踏破したと言われている。1562年にアルメイダが鹿児島で布教活動を始めた頃、南林寺という禅宗の大僧院の長老がアルメイダの教えを聴聞させるために、偉い学者でもある2人の仏僧をアルメイダのもとに派遣し、質問を浴びせた。その1人は偉大な数学者であった。フロイス（2000）によると、「彼は私《アルメイダ》に、日蝕、月蝕、干潮、満潮について質ね、その他、空気層の不完全な混合について幾多の質問をしました。ところで私は、これらすべての質問については回答を添えてノートに書きこんだものを携えて来ていましたので、それによって私は彼に幾つか図をもって証明しましたところ、彼はただちに私によって確信させられました。」（p. 247）とある。また、アルメイダも日本人の釈迦の教えに基づく宇宙観を聞き出す。日本人の宇宙観に対して、アルメイダはヨーロッパキリスト教徒の宇宙観で応答するのである。真の対話（ダイアログ）とは、たとえキリスト教の価値観に軸足はあっても、他の宗教の価値観について教えてもらうというよ

うな謙虚な姿勢がないと始まらないだろう。そういう意味で、アルメイダは対話（ダイアログ）を重視する人であったと考える。

医師としても商人としても非常に才能があったアルメイダは、日本の布教に大いに貢献した人でもあった。彼ほど日本の異教徒の心をとらえて、心から改宗させた人はいないと言われている。フロイスは後年、次のようにアルメイダを絶賛している。

彼《アルメイダ》は天分に恵まれており、イエズス会の仕事と布教事業に対してはなほだ稀有の特性を備えていた。主なるデウスは彼がこの（平戸から山口までの）巡礼の旅を行うように導き給うとともに、彼を召して日本でイエズス会員に採用された最初のポルトガル人になるよう導かれた。かくて彼は所持していたすべての物を、司祭ならびに修道士たちの生計、および貧しいキリシタンたちの扶助費としてイエズス会に譲渡した。すなわち当時司祭たちには、ポルトガル人らがその船で日本に渡航した時に与えられる寄付金以外に収入とは何もなく、ゴアの学院からミサ用の葡萄酒、衣服、書物、および若干の教会の装飾品が供給されていたに過ぎない。しかるに今や我らの主なるデウスは、このアルメイダ修道士をもっとも強力な柱の一つ、またここ 40 年間に日本に来た働き手の最良なる者の一人として選び給うたのであった。そして主なるデウスはこの初期の日本布教が順調に捗るように、また名声を博するようと、慈悲を垂れ、彼に特別の恩寵を授け給うた。なぜなら主は彼に幾多の困難や危険を冒して改宗への扉を開く能力のみならず、彼が日本人たちから格別愛され慕われるように天分を授けるを嘉し給うたからで、それはまた謂れないことではなかった。というのは、彼ら日本人の風習に関することや、彼らに快く思われる万事において、その才能が彼に匹敵するような者は今に至るまでイエズス会員の中に一人もいなかったのである。（フロイス、2000、p. 84）

8. おわりに

本稿の冒頭で言及したように、キリスト教の初期伝道期のアルメイダ達が活躍した時代に、飛躍的にキリスト教信徒が増えた理由の一つに、ザビエル、トルレス、アルメイダに共通して見られる布教のアプローチがある。布教とはまさにコミュニケーションそのものである。文化も言葉も異なる人々にキリスト教を伝えるという異文化コミュニケーションにおいて、彼らに共通する布教のアプローチから、自分達のヨーロッパの文化を絶対視することなく、先ずは、現地の人々の文化を尊重し、現地の言葉を学び、現地の文化に順応しながら布教活動を実践していることが、書簡から読み取れた。さらに、現地の人びとからの質問に答えるという形を取りながらダイアログ（対話）を重視するアプローチも読み取れた。

本稿で注目したアルメイダが、相手の文化を尊重し、ダイアログ（対話）を通してキリスト教を伝えていったのかという理由は、彼がユダヤ系ポルトガル人からキリスト教へ改宗した人であったことと深く関係があるのではないだろうかと考える。シリング（1992）は、「彼《アルメイダ》は新参基督教徒にしてムール人即ちユダヤ人の家から出た人である。」（p. 84）と書いている。アルメイダは、祖国ポルトガルでは、マイノリティ（ユダヤ教徒からキリスト教へ改宗者）であった。祖国で疎外感を感じた人であったからこそ、日本では、自文化を絶対視せず、他文化を尊重し、ダイアログ（対話）を重視するアプローチの方法を選択できたのではないだろうか。

しかしながら、宣教師達がすべてアルメイダのようなアプローチを採ったわけでもない。本稿

では紹介できなかったが、このようなアプローチとは真逆で保守的なアプローチを採る宣教師に、フランシスコ・カブラル (Francisco Cabral、1533-1609) がいた。トルレスの後任で、1570年に日本布教長になる。1579から2年間の最初の来日で日本の布教活動をつぶさに視察した巡察師ヴァリニャーノは、カブラルのネガティブな日本人観に基づく西欧文化中心主義の「同化型」の布教の状況を目にして失望する。そこで、ヴァリニャーノ⁸⁾は、日本布教の方針として、ザビエル、トルレス、アルメイダの「順応型」の布教活動とダイアログ（対話）を重視した異文化コミュニケーションの実践者としての布教活動を理論化し、具体的な実践策への構築へと進化させるのである。

ところで、本稿で引用した宣教師達の手紙は、イエズス会会員宛てのイエズス会会員による手紙（宣教報告書）である。可能ならば、当時の日本側の史料についての調査など含めて、今後も多角的な研究を続けていきたいと考えている。

註

- 1) 本稿は、日本コミュニケーション学会九州支部第21回大会（2014年10月4日、ホルトホール大分）での研究発表「アルメイダの病院運営と布教活動を通して考える異文化コミュニケーション」を加筆したものである。
- 2) または Luis d'Almeida と表記され、ダルメーダ、ダルメイダ等とカタカナ表記されることもある。本稿では、引用文以外は「アルメイダ」と記す。
- 3) 村田昌巳は、アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィンチェンツォ・チマッテイの日本語・日本文化に対するアプローチについて、科学研究費助成事業の研究報告書（平成25年6月26日）で報告している。
- 4) 手紙集『イエズス会士日本通信』は、村上長次郎によるエーヴォラ手紙集（1598）第1巻の翻訳。旧題名は『耶蘇会士日本通信』。日本布教の端緒から1580（天正8）年まで（日本年報制度の制定まで）の手紙形式の布教報告書である。
- 5) 出典は、Léon Bourdon, Luis Almeida, chirurgien et marchand avant son entrée dans la Compagnie de Jesus au Japon, *Mélanges d'Études portugaises*, 1949, Lisbonne p. 69: ニーレンベルグ (J.E.Nieremberg)、佐久間正訳「ルイス・デ・アルメイダ伝」、『キリシタン研究』第二十四輯『ルイス・デ・アルメイダ四百年記念特集』1984（若桑、2008b、p.488を参照）。
- 6) 「ライ病」という言葉は現在使われず「ハンセン病」という言葉が一般的であるが、引用文献なので旧名称を使用している。
- 7) ポルトガルのイエズス会司祭、1546年に入会。1548年にインドに渡り、ゴアでザビエルに会い、1552年ザビエルにより日本に派遣される。豊後府内（現在の大分県大分市）に赴き、大友義鎮（宗麟）に謁見して、教えを説き、翌年布教許可を得て、聖堂を建てる。
- 8) イタリア人司祭ヴァリニャーノは、1579年の初来日の記録を『日本巡察記』にまとめる。コレジオ・セミナリオの設立など布教体制を整え、天正遣欧使節の派遣を実施し、活版印刷機を日本に初めて紹介した人でもある。

引用文献

- 大分県立先哲資料館（2001）（編）『豊後キリスト教史』大分県立先哲資料館。
加藤知宏（1985）『ザビエルの見た大分—豊後国際交流史—』葦書房。
五野井隆史（1983）『徳川初期キリシタン史研究』吉川弘文館。
シリング、D.（1992）岡本良知訳『日本に於ける耶蘇会の学校制度』大空社。
東京大学史料編纂所（2014）（編）『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譯文編之三 弘治元年十一月—永禄二年十一月』東京大学出版会。

- 遠山淳（1997）石井敏、久米昭元、遠山淳、平井一弘、松本茂、御堂岡潔編「第15章 日本の異文化交流史」『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（pp. 106-110）、有斐閣。
- 遠山淳（2001）石井敏、久米昭元編「第10章 情報代謝理論より異文化交流史研究へ」『異文化コミュニケーションの理論』（pp. 151-162）、有斐閣。
- 遠山淳（2005）石井敏、久米昭元編「第4章 歴史からのアプローチ：異文化交流史のアプローチ」『異文化コミュニケーション研究法』（pp. 71-82）、有斐閣。
- フロイス、ルイス（2000）松田毅一、川崎桃太訳『完訳フロイス日本史6 ザビエル来日と初期の布教活動—大友宗麟篇1—』中央公論新社。
- 村田昌巳（2013）「アレッサンドロ・ヴァリニャーノとヴィチェンツォ・チマッティ（IV）コミュニケーション論的観点から（ヴァリニャーノ編）」『サレジオ工業高等専門学校研究紀要』第41号、1-8。
- 若桑みどり（2008a）『クアトロ・ラガッツイ（天正少年使節と世界帝国）上』集英社。
- 若桑みどり（2008b）『クアトロ・ラガッツイ（天正少年使節と世界帝国）下』集英社。